

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531039

研究課題名(和文) 保育者のワーク・ライフ・バランスが「学びの基礎力」醸成に与える影響

研究課題名(英文) Impact of Nursery Teachers' Work-Life Balance on Fostering the "Fundamental Ability of Learning"

研究代表者

佐藤 和順 (SATO, KAZUYUKI)

岡山県立大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：10413436

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は保育者の生活の状況としてワーク・ライフ・バランス、保育の質として「学びの基礎力」に着目し、両者の関係性を明らかにすることを目的とする。質問紙調査等を通して、保育者の理想と現実の生活には乖離があること、ワーク・ライフ・バランスの満足度が高い保育者は、保育の評価も高く、「積極的なかわり」を保育に取り入れる傾向があることが明らかとなった。また、保育者が質の高い保育を認識することで、行動も質の高い保育へと変化していくことも明らかとなった。保育者のワーク・ライフ・バランスの実現をはかることは、「学びの基礎力」醸成に寄与し、保育の質の向上につながると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study focused on nursery teachers' work-life balance in terms of their lifestyle and the "fundamental ability of learning" in terms of quality of childcare, aiming to clarify the relationship between the two. The findings of a questionnaire survey indicated that there were discrepancies between "ideal" lives and "real" lives of the nursery teachers, and that nursery teachers who were more satisfied with their own work-life balance had a higher evaluation in their childcare practice and higher tendency to incorporate "active involvement" in the practice. Recognition of the concept of high-quality childcare was found to lead to behavioral changes that improved quality of childcare. Thus, promoting a better work-life balance of nursery teachers could contribute to fostering the "fundamental ability of learning" and facilitate improvements in the quality of childcare.

研究分野：幼児教育

キーワード：保育者 ワーク・ライフ・バランス 積極的なかわり 学びの基礎力

1. 研究開始当初の背景

今日、少子高齢化等の急速な進行により、女性と男性がともに社会に参画し、性別にとらわれることなくいきいきと充実した人生を送ることができる男女共同参画社会を築くことが重要な国民的な課題となっている。特に少子化の観点から、子育て世代の仕事と育児の両立支援に特化するならば、子育て期の女性の社会進出を推進するためには保育施設の充実が引き続き重要となってくる。しかし、預かり保育に代表される長時間保育、多様な保育ニーズへの対応等保育者の職場環境は厳しさを増してきている。保育者の労働条件の悪化が、保育の質の低下につながるなどの指摘もある。しかし、保育者の労働条件と保育の質に関する実証的な研究は十分ではない。

2. 研究の目的

本研究は、保育者の生活の状況と保育の質がどのような関連性を有しているのかを明らかにするものである。保育者の生活の状況としてワーク・ライフ・バランスに着目し、保育の質として「学びの基礎力」に着目する。ワーク・ライフ・バランスは「仕事」と「家庭生活」「地域・個人の生活」を年齢や生活状況に応じて個人の希望に応じて調和させることを目指すものであり、平成 22 年に閣議決定された「子ども・子育てビジョン」においてもその実現が必要であるとして政策の中心となっている。また、「学びの基礎力」は、幼稚園・保育所と小学校との連携を一層強化し、子どもの発達や学びの連続性を確保することが重要であるとする幼児期からの体系的な教育の実施の基盤となるものである。

具体的な目的は以下のとおりである。

(1) 保育者のワーク・ライフ・バランスの状況調査

幼稚園教諭・保育士を対象にした全国的な質問紙調査の実施

(2) 「学びの基礎力」の醸成に着目した保育の質の調査

幼稚園教諭・保育士等が合同で保育実践を検討後、保育の質を図る評価指標を作成

本研究にて作成した評価指標を用いた保育の質の評価の実施

(3) 保育者のワーク・ライフ・バランスと「学びの基礎力」醸成の関係性の調査

保育者のワーク・ライフ・バランスと「学びの基礎力」醸成を視点とした保育の質の評価指標の関係性の検証

質問紙調査の精査及びエスノグラフィー

的研究の実施

本研究において保育者の生活と保育の質に関係性があることが明確化するならば、保育者が充実した毎日を送ることは保育の質の向上につながり、子どもの生活の充実につながると思う。

3. 研究の方法

(1) 「ワーク・ライフ・バランス」と「幼児教育」の基礎的資料・文献等の検索・収集・複写・分類と整理

(2) ワーク・ライフ・バランスと保育に係る先進事例の研究

現在でもワーク・ライフ・バランスの先進国であるアメリカの保育者等を研究対象とする

(3) 保育者のワーク・ライフ・バランス意識の全国調査

保育者の「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」の関わり方を視点に調査を進める

(4) 「学びの基礎力」に関する研究会の実施

研究対象園の幼稚園教諭・保育士が「学びの基礎力」をどのようにとらえるのかという共通認識の獲得と醸成のために保育をどのように実践するのかを協議する研究会を実施する

4. 研究成果

(1) 「ワーク・ライフ・バランス」と「幼児教育」の基礎的資料・文献等の検索・収集・複写・分類と整理及び、先進事例（ワーク・ライフ・バランスの先進国であるアメリカ）の研究

わが国におけるワーク・ライフ・バランス研究はその緒に就いたばかりである。またその研究は、労働形態や経済学の見地から検討されたものが主である。ワーク・ライフ・バランスに関する先行研究の整理及び分類を保育の観点からすること、アメリカの幼稚園における先進事例の研究を通して、わが国における保育分野のワーク・ライフ・バランス研究の枠組みを構築することできた。

(2) 研究対象園における幼稚園教諭の労働時間調査の実施及び、質問紙によるワーク・ライフ・バランスに関する意識調査の実施

労働時間調査からは、行事に追われ長時間勤務を余儀なくされる幼稚園教諭の実態が

明らかになった。

意識調査からは、仕事と家庭生活を大切にしたいと考えながら、仕事中心の生活であることがわかった。またワーク・ライフ・バランス実現のためには個人で対応可能な現実的な取組と行政等による体制・制度の構築が必要であると考えていることが明らかとなった。

(3) 全国規模の保育者を対象とした質問紙調査の実施

保育者のワーク・ライフ・バランスに係る意識と保育の評価との関係性を検証する調査を実施した。

保育の質に関しては、保育の質尺度の中から、米国国立小児保健・人間発達研究所(NICHD)が全米の新生児を対象にした長期追跡調査に使用した「積極的なかわり」チェックリスト(The Positive Caregiving Checklist)を保育の質の評価に用いた。

本調査から得られた知見は、次の通りである。第一に、性別役割観とワーク・ライフ・バランスの意識には関連がある。性別役割観が、ワーク・ライフ・バランスの捉え方に影響を及ぼしている。第二に、保育者は理想と考える生活とは異なり、仕事中心の生活をおくっている。理想と現実の生活の間には乖離がある。第三に保育者のワーク・ライフ・バランスと保育の評価には関連性がある。保育の評価の高い保育者は、ワーク・ライフ・バランスの満足度も高い傾向にあり、「積極的なかわり」を保育に取り入れている。

保育者がワーク・ライフ・バランスを実現することも、保育の質を保障する一助になると考えられることが明らかとなった。

(4) 教師・保育者を志望する学生を対象にした質問紙調査の実施

保育者養成段階に着目し、将来、子どもに関わると予測される教師・保育者を志望する学生を対象にワーク・ライフ・バランス、男女共同参画社会に関する意識調査を行った。

本調査から得られた知見は、次の通りである。第一に、性別役割観とワーク・ライフ・バランス等の意識には一定の関連性があるといえる。第二に、学生は性別役割観とは関係なく、就職をすれば仕事が自らの生活の中心になると推測しているということがあげられる。このことは理想の生活と異なり、理想と現実の生活の間には乖離が存在することを予測していることを意味している。第三に、ワーク・ライフ・バランス実現のために、根本的にワーク・ライフ・バランスについて十分に理解されていないことが問題としてあげられた。

保育者のワーク・ライフ・バランス実現の課題を、教師・保育者を志望する学生は、養成段階から予見していることが明らかとな

った。

(5) 保護者を対象にした質問紙調査の実施

保育者のワーク・ライフ・バランスに関連して、家庭において中心的に子どもにかかわる保護者のワーク・ライフ・バランス意識と子育ての評価の関係性を明らかにするために研究対象園の保護者を対象に質問紙調査を実施した。本調査は保育の質の評価の精度を補完するという意味も有する。

本調査から得られた知見は、次の通りである。第一に、保護者の理想の生活と現実の生活の間には、乖離が存在する。保護者は、「家庭生活」や「個人・地域の生活」を充実させたいと考えているが、実際の生活では「仕事」中心であるという認識を有している。ワーク・ライフ・バランスの調和度については、全般的に高い傾向を示した。第二に、保護者のワーク・ライフ・バランスと子育ての評価の関係性については、ワーク・ライフ・バランスの調和度等が高い保護者は、子育ての評価が高いことが明らかとなった。また、「積極的なかわり」を子育てに取り入れているという傾向も把握した。

子育ての環境を整え子育てのスキルを向上させるのと同様に、保護者の生活環境を整え、ワーク・ライフ・バランスを取れるようにすることも、子育ての質を高めることになり得る。

(6) 「学びの基礎力」の醸成に着目した保育の質の調査

子どもの「学びの基礎力」の醸成を目指すために保育者に必要とされる「積極的なかわり」に着目し、「保育の質の指標」を作成し、検証を行った。作成した指標を理解するための研究会を実施し、エスノグラフィーの手法を用い研究対象園で保育の質に係る調査を実施した。具体的には、「積極的なかわり」に関する研究会に参加する実験群と参加しない統制群に分類し、保育場面をビデオカメラで撮影し、得点化し、応用行動分析の知見に基づき分析を行った。

調査の結果、保育者が質の高い保育を認識することで、行動も質の高い保育へと変化していくこと、変化の表れやすい項目があること、保育者の属性、担当クラスが影響することが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

佐藤和順・柏まり「保護者のワーク・ライフ・バランスが子育ての評価に与える影響」、『家庭教育研究』、査読有、第20

号, 2015, pp. 25-35

佐藤和順・柏まり, 「保育者の幸福感が生活の満足度及びワーク・ライフ・バランスに与える影響」, 『人権教育研究』, 査読有, 第 14 巻, 2014, pp. 59-73

佐藤和順・熊野道子・柏まり・田中亨胤, 「保育者のワーク・ライフ・バランスが保育の評価に与える影響」, 『保育学研究』, 査読有, 第 52 巻第 2 号, 2014, pp. 99-110

佐藤和順, 「生活史的アプローチによるアメリカの日系幼稚園日本人教師のワーク・ライフ・バランスに関する研究」, 『就実論叢』, 査読無, 第 42 号, 2013 年, pp.115-131

佐藤和順, 「教師・保育者を志す学生のワーク・ライフ・バランス意識-再生産構造の基点としての教師・保育者に着目して-」, 『保育学研究』, 査読有, 第 50 巻第 1 号, 2012, pp. 41-52

佐藤和順・柏まり, 「幼稚園教諭のワーク・ライフ・バランスに関する意識と実生活の乖離」, 『人権教育研究』, 査読有, 第 12 巻, 2012, pp. 55-67

〔学会発表〕(計 3 件)

佐藤和順・柏まり, 「『積極的なかわり』を視点とした保育の質の評価に関する考察」日本保育学会第 68 回大会, 2015 年 5 月 9 日, 椙山女学園大学(愛知県名古屋市)

柏まり・佐藤和順, 「S 幼稚園における聞く力に関する実践研究 素話を通した 4 歳児・5 歳児の表現内容の分析」, 日本保育学会第 67 回大会, 2014 年 5 月 17 日, 大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学(大阪府大阪市)

佐藤和順・柏まり, 「保育のワーク・ライフ・バランスが保育の評価に与える影響」日本保育学会第 67 回大会, 2014 年 5 月 18 日, 大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学(大阪府大阪市)

〔図書〕(計 5 件)

佐藤和順他, 株式会社建帛社, 保育職論, 2015, pp. 150-161

佐藤和順, 株式会社みらい, 保育者のワーク・ライフ・バランス 現状とその課

題, 2014, 127

佐藤和順, テクノ株式会社, 保育者のワーク・ライフ・バランスが「学びの挙措力」醸成に与える影響研究成果報告書, 2015, 181

佐藤和順他, 株式会社みらい, 子どものいまとみらいを考える 教育課程・保育課程論, 2014, pp. 52-60

佐藤和順他, 株式会社みらい, 新・保育原理 - ずばらしき保育の世界へ - 第 2 版, 2012, pp. 217-238

〔その他〕

ホームページ等

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~wajun/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 和順 (SATO Kazuyuki)

岡山県立大学・保健福祉学部・教授

研究者番号: 1 0 4 1 3 4 3 6